慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マルク・ブロックと歴史
Sub Title	Marc. Bloch and history
Author	渡邊, 國廣
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1956
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.49, No.12 (1956. 12) ,p.890(54)- 898(62)
JaLC DOI	10.14991/001.19561201-0054
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19561201-0054

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

マルク・ブロックと歴史

渡邊國廣

一

十九世紀と二十世紀に歴史の研究は驚くべき繁榮を示した。しかし歴史理論について反省は乏しく、學問の發展を跡づけようとする者の間で大きな驚異の一つとなつた。

過去は疑いもなく歴史研究の對象であつた。しかし過去について知ることが歴史本來の在り方ではない。だとすれば歴史とは何か。これまでの歴史理論に求めるものは何らない。歴史の實際と接觸なしに生活するという重大な誤謬を冒しながら、歴史理論が試みられた。またモヌメンタ・ゲルマニア・ヒストリカが何であるかも知らずに、歴史理論への挑戰が見られた。功を急いで基礎知識を缺くため、これら多くの努力は失敗に終つた。

今や歴史理論の確立は重大な課題となつた。しかし一般にはこの問題について觸れることが避けられて來た。かかる態度は多くの理由によつて説明されようが、何よりも重要な理由は、學問的良心について反省する道德的必要を感じていないという事情であつた。例えばアンリ・ピレンヌの如きも歴史理論に對し無關心ではなかつたが、決して積極的とはいえない。歴史理論について彼は、僅かに「歴史家の任務」[1]と題する小論を殘すのみであつた。

（1）原著は La tâche de l'historien. 小篇ながら非常に有益なこの論稿は一九三一年八月 Flambeau 紙に掲載され、後に英譯されて Stuart A. Rice ed. Methods in Social Science, Chicago, 1931 に轉載された。

ともあれ、公正で、學問的に何の不安も感ぜしめない論者によつて歴史理論が進められて來た。また基本的知識についてもいかがわしい論者によつて歴史理論が組立てられようとした。むしろその方が多かつた。しかしこの場合においても、思想を表現するための十分な素養を缺くため、思索の結果が公刊されるのは稀であつた。歴史理論の發表については總じて愼重であつた。むしろ愼重に過ぎた。誰も同學の冷笑を浴びる危險の多い途に進んで入ろうとはしないであろう。

しかしどちらかといえば、歴史の何たるかを知らぬ者が歴史理論について考え、知る人々は逆に等閑視した。このため歴史理論は初歩的な段階から拔けることが出來なかつた。歴史の研究と比較して後れ、未だに建設の途中にある。

二

マルク・ブロックの遺著「歴史のための辯明―歴史家の仕事―」[1]を披見することによつて誰しも感激と歡喜を覺えるに違いない。實にこの書は歴史理論についての無限に貴重な著作であつた。マルク・ブロック自身は「日々の仕事について思索することを常に愛した一職人の覺書」[2]としているが、決してそのようなものではない。彼の人柄を知る者にとつて正にこの書は偉大な人格者の遺書であつた。

（1）原著は Apologie pour l'histoire ou Métiers d'historien, Paris, Armand Colin, 1949, 2e édition 1952; XVII-112 pages (Cahiers des Annales, n° 3) この書は我が國でも反響を呼び、いち早く柴田三千雄氏による紹介を『歴史學研究』第一五一號（昭和二六年九月）誌上に得た。また今回は讃井鐵男氏の譯業が岩波書店より刊行された。なお原著には既に英譯がある。

（2）Introduction, p. XVIII. 譯書 XIX 頁參照。以下譯書からの引用は必ずしも讃井氏に從わなかつた。

同時に人間の遺書ということが出來よう。何故ならマルク・ブロックにおいては、人間であることと歴史家であることが一つだからであつた。彼においてかつてこの二つが離れたことを知らない。マルク・ブロックはこの書を血をもつて書いた。從つて普通一般の著書とはわけが違う。そのなかで語られた確信は、生活一般についての彼の考え方に結びつき、自由と人間性に深く根ざしていた。「歴史のための辯明」は、マルク・ブロックがドイツ人の銃彈で倒れた一九四四年六月十六日の不吉な夜で終つた。[3]彼の死は對獨抵抗（レジスタンス）でフランスが拂つた最大の犧牲であつた。

（3）マルク・ブロックの生涯と輝かしい最期については既に研究が多い。主要なものとしては L. Febvre, De l'histoire au martyre, Annales d'Histoire Sociale, 1945; G. Altman, Au temps de la clandestinité: notre《Narbonne》de la Resistance, Ibid; L. Febvre, Marc Bloch et Strasbourg, Faculté des Lettres de l'université de Strasbourg; Mémorial des années 1939-1945, Paris, 1947; R. Boutruche, Marc Bloch vu par ses élèves, Ibid; Ch.-E. Perrin, l'œuvre historique de Marc Bloch, Revue Historique, 1948, t. 199 が擧げられよう。そのほかマルク・ブロックの著書 L'étrange defaite, Paris, 1946 に付されたG・マルトンの序文が重要。特にブロックの悲壯な最後についてかつて我が國でも紹介されたことがあつた。例えば柴田三千雄氏前掲稿、『思想』昭和二八年八月號所載の河野健二氏稿を參照。

マルク・ブロックが倒されて間がない。悲劇の記憶が未だ新しいというのに、この書に盛られた思想を分析し、判斷し、批判するのは非常な冒瀆であつた。幸いにして目的はそこにない。單にマルク・ブロックの根本思想を跡づけ、その偉大さを示そうと思うのみである。

思想の根本においてマルク・ブロックは、社會學から最も多く受取り、社會學へ最も多く與えた歴史家の一人であつた。同學のペランはこの點を的確な言葉で傳える。「マルク・ブロックの思想に影響したあらゆる學問のうちで、最も効果的な作用を果したのは、確かにデュルケームの社會學であつた。……社會學から彼は歴史に對する彼の理解を支配した社會集合という概念と、社會事實の研究法を學んだ。彼に集合表象の説得力を敎え、また常識を基礎とした議論に對し彼に注意したのは社會學であつた。……歴史は、彼の體系のなかで、時間の概念に非常な重要性を付した社會學の姿をとつた」[4]。またブロック自身の次の言葉は、ペランのこの見解を裏書きするに足るであろう。「社會學者と歴史家、私はこの二つの言葉の間に溝がないと信ずる者の一人である」[5]。

(4) Art. cit., p. 183-184.

(5) Revue Historique, 1934, t. 173, p. 4.

三

「歴史のための辯明」は一九四一年から二年にかけて書かれた。しかし未完に終つた。從つてマルク・ブロックの思想がそこでは不完全な形でしか表現されていぬ。しかしもし一册の書物として完全にまとめられれば、理解が困難な程に內容の豐富で複雜なものとなつたろう。しかし殘された一般的な計畫から判斷すれば、マルク・ブロックは全部をいう氣がなかつた。本質的と思われる若干の問題に限る積りであつた。從つて未完とはいえ、豫定した計畫の大部分が滿たされていると見なければならない[1]。

(1) 「辯明」の刊行を託されて手稿を受取つたのは、親友のリュシアン・フェーヴルであつた。卷末に付されたフェーヴルの解說は、この手稿を整理して書物の體裁にまとめるまでの彼の苦心について詳述している。

しかし「辯明」は依然として未完の著書であつた。それは他日完成されなければならない。マルク・ブロックの友人と尊敬者が果すべき義務のある崇高な課題であり、決して怠つてはならないであろう。實り多い生涯を通じてマルク・ブロックが書き溜めた多くの論文や書評から「辯明」には盛られていぬ歴史について彼の思想を集めねばならない[2]。理論の廣さといい深さといい全く驚異であつた。

(2) この種の作業はペランの前揭の論文で巧妙に果された。マルク・ブロックの主要な提言を整理した重要な業績である。

何よりも注意を惹くのは「辯明」のなかで取上げられた問題の選擇についてであつた。或る問題について、マルク・ブロックは詳述し、また或る問題は熟慮の末これを破棄した。

例えば歴史が科學であるか、それとも藝術であるかという古い論爭については、少しだけ觸れるに止まつた。そして結局はこの論爭の無意味なことを主張した。曰く「一八〇〇年の頃、我々の曾祖父たちはこの問題について物々しく議論することを喜んだものであつた。後に一八九〇年頃になると、やや素朴な實證主義の雰圍氣のしみこんだ方法論者たちが、歴史著作における彼等のいわゆる形式というものを世間が餘りに重要視するのに憤慨する光景が見られた。科學に對する藝術、內容に對する形式――これらは、スコラ哲學で見られた論議のようなつまらぬ議論として葬らるべき七面倒な論爭にしか過ぎぬ」[3]と。また歴史における客觀性という古典的な問題についても、マルク・ブロックは少しも關心を寄せぬ。何よりも社會事實に關する歴史家をもつて自任するブロックは、この種の問題が個人意識に關心を寄せる人々にのみ屬する問題と考えたためであろう。

(3) p. 4. 譯書九頁參照。

これに反しマルク・ブロックにとつての問題は、歴史の正當性の問題であつた。「歴史は何の利益があるか」。そこに彼が答えようとした第一の問題があつた。しかしここでブロックの解答を彼自身の言葉によつて詳しく辿る必要がない。ただ過去と現在を結び、また「自明であるという特權」を現在から奪う絆についてのマルク・ブロックの主張を示せば十分であろう。彼は「過去によつて現在を理解し」なければならないとし、この申立を實例によつて證明する。曰く「北佛の農村を歩き廻つた觀察家で、耕地の奇妙な型に心を打たれなかつた者はないであろう。所有權の變動が時代の經過と共に最初の計畫を修正したにも拘わらず、耕作に適する土地が無數の小土地に分割されて極端に狹く且つ長く延びている耕地の光景は、今日もなお農學者を當惑させるに足るものを有している。このような配置に伴なう精力の浪費と、それが開墾者に蒙らせる不便は論を俟たないところである。これを如何に説明すべきか。忙し過ぎる政治評論家たちは、民法典とその避け難い影響によつてと答えた。だから相續法を改正するがよい、そうすれば一切の弊害は除去されるであろうと彼等は付言した。もし彼等が歴史をもつとよく知つていたならば、またもし幾世紀にわたる經驗主義によつてつくり上げられた農民の精神狀態をもつとよく調べたならば、彼等は救濟方法がそれ程容易でないことを知るであろう。實際この型は非常に古い起源に遡ぼるので、今まで一人の學者もこれを滿足に説明することに成功した者はいない。ドルメン時代の開墾者たちは恐らく第一帝政時代の法學者たちよりももつとよくそれを了解していたであろう。それ故ここでは、矯正法がないため、……原因に關する誤謬が長引くので、過去に關する無智は現在の認識を害するに止まらず、現在においては行動そのものをも危うくする」[6]と。現在のよりよき解明のための過去の理解であり、歴史研究の利益は正にこの點に存した。從つて「人間たちについての學問」では「死せるものの研究と生けるものの研究とを結合することを絶えず必要とする」[6]。歴史研究に

臨んでのマルク・ブロッグの態度を示す重要な提言であつた。

（4）p. 11. 譯書二一頁參照。
（5）p. 11. 譯書二二―三頁參照。
（6）p. 15. 譯書二九頁參照。

四

主題に「歴史のための辯明」が掲げられるからには、歴史の「教訓」についても說き及ぶべきであつた。しかしマルク・ブロックはこの肝心の問題に一言も觸れていぬ。これまで歴史に對し向けられた非難[1]について彼は知る筈だから、この沈默は或る意味でポール・ヴァレリの歴史觀に對する同意と受取つてよい。少なくともそう思われた。「歴史は人々が欲するところのものを辯明する。現實に歴史は何も教えぬ。……歴史はすべてのことを含み、すべてのことに對して實例を與える[2]」といつたあのヴァレリである。

（1）そのような非難のうち最も特徴的なものについては、Introduction, p. XIII. 譯書 XII 頁を參照。
（2）Regards sur le monde actuel, Paris, 1933. p. 64.

歴史家の仕事について辯解を終つたブロックは、次いでこの仕事を如何に組立て、また實行するかに關連して示した。歴史についての彼の考え方は、またもし彼最愛の言葉の使用が許されるとすれば、歴史についての彼の綱領[3]は、理論的歴史家の考え方と全く違つていた。理論家は一般に歴史の論理的・合理的・幾何學的構成に腐心した。しかしマルク・ブロックは、人間も社會も定理に從つて構成し得ないということを知つていた。人間が存在する場所で、もつとも歴史においては人間がいたる所で現われるが、幾何學の精神は影響力を持たぬ。歴史家の仕事は緻密の精神によつて指揮されるほか望まない。

（3）Introduction, p. XVII. 譯書 XVIII 頁に「私は告白するが、この書のうちには一部分綱領が含まれている」とある。

緻密の精神・眞に人間的な理解の努力こそ必要であつた。そしてこれがまた歴史研究を貫ぬく基調でもあつたのである。强引な體系化が歴史においては蔑視される。マルク・ブロックは少なくともそう考えた。

この考え方が「辯明」では、時代區分に對する批判の部分において最も完全に展開されていた。時代區分は、歴史における體系化と理論化の端的な表現であつた。ドイツ人の諸學者はこの時代區分を重視し、學問における獨立の一分野にまで高めた。これに對しマルク・ブロックは、嚴密な時代區分の無駄なことを訴えた。「世紀」とは何か。「年代が一という數字で終る年が人類發展の界點と一致するということを、不幸にして如何なる歴史法則も强制しない[4]」。「治世」とは何か。政治史から離れれば、切斷は隨意である。フィリップ・オーギュストの治世の宗教史、またルイ十五世の治世の經濟史が書かれはした。しかし「ルイ・パストゥール著『グレヴィ大統領第二回任期中私の實驗室で起つた事柄の日記』、或いは逆に『ニュートンよりアインシュタインにいたるヨーロッパの外交史』がどうしていけないことがあろうか[5]」。「世紀」といい「治世」といい、時代區分の決定的な基準となり得ないというのがブロックの持論であつた。

（4）P. 92. 譯書一五二頁參照。
（5）p. 93. 譯書一五三頁參照。

事實において「人間的な時間は、柱時計の持つ無情な畫一性と嚴格な區分に常に反抗するであろう。人間的な時間に必要なのはその……變り易さに調和した測定であり、またこのように現實がそれを望むが故に、人間的な時間は、限界として境界區域しか認めないことを承認する。このような柔軟性によつて、歴史は、ベルグソンの言葉によれば、その分類を『現實の輪郭そのもの』に一致させることが出來る。卽ちこれが本來あらゆる學問の最後の目標なのである[6]。」

（6）P. 97. 譯書一五九頁。地理的區分について マルク・ブロックは既に類似の考え方を示した。Pour une histoire comparée des sociétés européennes. Revue de Synthèse Historique. 1928, Vol. II, p. 44-45 參照。

歴史は現實の上に、換言すれば人間の上に築かれる。マルク・ブロックが全力を向けたことは正にそこであつた。彼が歴史家に對して割當てた課題は、人間についての情熱的な探索である。ブロックによれば、歴史家は物語における食人鬼の如くあらねばならぬ。また彼は人間の肉に對し渴望を持たねばならない。「風景の目につく特徴、道具もしくは機械の背後に、また表面上は冷淡極まる文書や、制定した人々とは一見全く無關係に見える制度の背後に」、歴史家が把握しなければならないのは「人間たちである[7]」。「そうすることの出來ない人は精々知識の人足に過ぎないであろう」。

（7）p. 4. 譯書八頁參照。

人間達を理解しようとする歴史家は、同時に人間たちを判斷しなければならないのか。一般にそう信じられていたとマルク・ブロックは考えた。「長い間歴史家は、死んだ英雄たちに讃辭ないし非難を割當てる任務を持つた一種の地獄の審判官と看做された。このような態度は一つの根强い本能と考えざるを得ない。何故なら生徒達の答案を添削しなければならない先生たちは、これら少年たちが机の後からミノスやオシリスの役割を演ずるのを制止することが如何にむずかしいものであるかを知つているからである[8]」。これに對し「辯明」の著者は、價値判斷が歴史において場を持たないと考えた。そして價値判斷が內容空疎なものであることを示すために、彼は、道德的基準や歴史に對する興味が相對的なものでしかないという古典的な議論をもつてした。歴史において絶對的なものはあり得ない。むしろマルク・ブロックにおいては價値判斷が學問發展を阻碍する

ものとして排擊されさえした。曰く「人類の知的發展の教訓は明瞭である。即ち學問は善惡の古い人間中心主義を思い切つて放棄すればする程豐かとなり、從つて最後にはそれだけ實際に役立つようになることを示した。今日なら鹽素のような惡いガス、酸素のような良いガスを區別する化學者を人は笑うであろう。しかしもし化學がその初期においてこのような分類を採用したならば、化學は物質についての認識を大いに傷つけて、この分類にはまり込んでしまう大きな危險を冒したであろう[9]」と。

（8）　P. 70. 譯書一一四頁參照。

（9）　p. 71. 譯書一一六―七頁參照。

知られる如く、マルク・ブロックは歷史のなかに「法則」を求めない。むしろ歷史法則の存在を否定した。このことは、歷史法則を發見しようとした社會學派に對して向けられたブロックの皮肉まじりの次の言葉によつて知ることが出來よう。曰く「或る人たちは……人類進化の科學を創設することが可能であると信じ、それを建設することに最善の努力を傾けた。もとより、極めて人間的ではあるが、合理的な知識には甚だしく適しないように思われる多くの事實を、最後のところで、こうした人間認識の及ばぬものとして放置する肚を決めてかかれば、それで事はすむのである。この殘餘のもの、それは、彼等が輕蔑して出來事と呼ぶものである。それはまた最も密接に個性的な生活のかなりの部分でもあつた。これが、要するに、デュルケームによつて基礎を置かれた社會學派の立場である。少なくとも、たとえいやいやながらでも自然の成り行きに從わないだけの知性を持つた人々が、次第に初期の窮屈な原則を柔らげたように見えるという點を考慮の外に置くならば。この偉大な努力に我々の研究は負うところ多大である。それは問題を一層深く分析し一層しつかりと把握し、敢えていうならば、餘り安易に考えないことを我々に敎えた。このことはここでは限りない感謝と尊敬とをもつて語るほかはないであろう。今日この努力が凌駕されているように見えても、それは、すべての知的運動が早晩その豐富さの代償として拂わねばならない年貢である[10]」と。

（10）　Introduction, XV. 譯書XV頁參照。

たとえそのなかで謝辭が呈せられていたとしても、ブロックが歷史法則を目指す社會學派の立場を捨てたことは明白であつた。この點は、發展の「法則」についてブロックが拒否の態度を示したことからも明らかである。ブロックはこの存在を無視した。「辯明」のなかで彼は發展（エボルシヨン）法則に一言を觸れていないし、また發展という言葉を「辯明」のなかにおいて一度も用いていぬ[11]。

（11）　この點については既にリュシアン・フェーヴルが指摘。p. 107 譯書一七三頁參照。

五

以上の引用は、內容豐富な「辯明」の本當の一部に限られていた。從つて更にここで、歷史的觀察・證據の批判・歷史における蓋然性・用語の問題に關連して扱つた部分についてまで言及すべきであつた。しかし如何に巧妙な要約も、また如何に適切な引用も、全體を通讀して見ることには及ばないであろう。マルク・ブロックの思想は、彼の著述のなかに追う以外に眞の偉大さを明らかにすることが出來ない。讀まねばならないのは「辯明」である。

マルク・ブロックは學界の巨星であつた。彼の名は、ルュシアン・フェーヴルの名と並んで、現代の歷史理論の上に測り難い影響を及ぼした社會經濟史年鑑（アンナル・ディストワール・エコノミーク・エ・ソシアル）と共に記憶されるに違いない。マルク・ブロックとルュシアン・フェーヴルはこの年鑑（アンナル）を新しい歷史のために捧げた。新しい傾向を年鑑（アンナル）のなかで隨所に散見することが出來た。しかし舊態依然たる歷史思想の展開は依然として根强かつた。そのようなものの第一に、ラングロワとセニョーボの「歷史研究のための序說」が擧げられよう。「序說」こそブロック派が交替を迫つた時代後れの歷史家の主張であつた。

（1）　この雜誌は屢々その表題を變えている。旣ち 1929-1938: Annales d'Histoire économique et Sociale; 1939-1941: Annales d'Histoire Sociale; 1942-1944: Mélanges d'Histoire Sociale; 1945: Annales d'Histoire Sociale.（一九四六年以降は Annales (économies, Sociétés, Civilisations.) この全卷をブロックとフェーヴルは「もつと廣い、もつと人間的な歷史」によつて埋めようとした。

マルク・ブロックと歷史

この感情は「辯明」のなかに見出される。ブロックがラングロワやセニョーボから引用するのは、この先輩たちに對する感謝を示すためばかりでなく、同時にこの先輩たちの考え方から遠く離れていることを明確にするためであつた[2]。ルュシアン・フェーヴルに宛てた手紙のなかでブロックはいう。「デュルケームは確かに馬鹿でない。（顏をしかめるだろうが）セニョーボも馬鹿ではない。シャルル五世（シャルル＝ヴィクトール・アングロワの綽名）も馬鹿ではない。しかし我々は如何にこの二人から遠くにあることか[3]」と。

（2）　p. 109. 但し譯書では VI-VII 頁の註一。

（3）　Annales d'Histoire Sociale, 1945, I, p. 31. に引用。

しかし結局において「歷史のための辯明」は「歷史研究のための序說」に如何なる點で反對なのか。「序說」を讀んだ後で「辯明」を讀んだ者に即答を求めることは出來ない。事實「辯明」のなかには、「序說」に見られる多くの內容が盛られている。ラングロワもセニョーボも優れた批判家であつた。批判家という點でいずれも劣らぬ。しかしその他の面で彼等の相違點は餘りにも深く、從つて簡單に說明することが出來ない。相違點を知るためには「辯明」だけで不十分である。たとえ「辯明」がマルク・ブロックの歷史思想を示すまとまつた著述であるとしても、年鑑（アンナル）に投稿されたブロックの論稿の全部に眼を通す必要がある。鍵はそうすることによつて與えられるに違いない。

「歷史研究のための序說」は「第一に技巧」と敎える。この合言葉

をマルク・ブロックは輕蔑した。ラングロワとセニョーボにとつて歴史の良書というのは、證據調べが行き屆き、眞摯な批判の上に築かれ、偏頗なく組立てられたものでなければならなかつた。ブロックは何よりも、「巧みにつくられた」歴史書を排擊した。「技巧」に對しブロックは「探索」を選んだ。見逃がされた困難な問題を追求する書物、新しい方向にある書物、未提出の問題を提起した書物、かかる書物こそ好ましいとブロックは考えた。ラングロワやセニョーボは優れた批判家であつた。マルク・ブロックはこの點を認めるが、しかしほかに彼等は何の能力も持たなかつたと非難した。またブロックは、歴史の進歩が何よりも知性の進歩に結びついていると

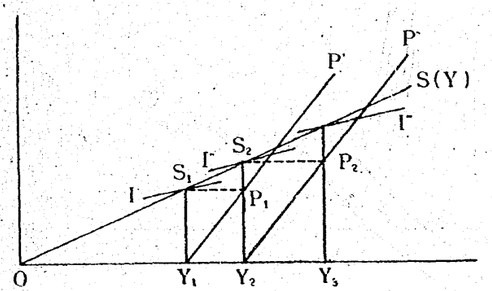
いうことを後進に敎えなかつたと非難した。過去の人間たちをよりよく理解するためには證據について研究することが疑いもなく重要である。しかし證據から眞實を引出すことはもつと重要である。ラングロワとセニョーボは歴史の研究においてこれを忘れた。ただ巧妙にまとめることに腐心し、その術を敎えたのみであつた。彼等は問題を提起する術を忘れた。[4] マルク・ブロックの敎えたのは彼等の忘れた正にこの點であつた。

（4）「辯明」のなかでこの點に關する非常に意味深い言及は、原著二六頁譯書四五―七頁に見られる。

書評及び紹介

D. Hamberg, Economic Growth and Instability, New York, 1956, pp. 340＋VIII.

經濟成長の問題はハロッド、ドマールによつて取上げられてから、長期沈滯を對象としてそれからの脱却を論じたものとして、ケインズ理論を更に一歩進めたものとしての意義があつた。しかしハロッド理論の重要な概念である「企業の滿足する成長率」とは具體的に何を指すのか不明であり、その他にも具體的計測不可能の概念が多いためこれを實際の政策に適用するには多くの困難が殘されている。ここに紹介する D. Hamberg, Economic Growth and Instability, New York, 1956, pp. 340＋VIII はこれ等の困難を乘り越えて計測可能な成長率の理論の完成を狙つた著書であるが多くの問題を殘している。その内容は第一章序論、第二章資本の增大と完全能力に必要な成長率、第三章ハロッドの動學、第四章一定率の成長に對する潜在的障碍、第五章種々の成長率、第六章完全能力成長率の不安定性、第七章成長理論におけるラグの役割、第八章一定率成長からの乖離、となつているが、彼はロビンソンに倣つて完全雇用に對應する概念として資本の完全利用――完全能力なる概念を導入し、これをハロッドの「企業の滿足する成長率」の概念におきかえようとの努力をする。從つてこの書の中心課題はハロッドの G_w 概念の修正である。

始めに先ず成長率理論の意義がとり上げられる。古典學派の理論は何れも靜止狀態から出發していたため、これを國民所得の理論に結びつけることができなかつた。マルクスは經濟の發展とその不安定性について論じているが、餘剩價値率一定の理由を説明していない。利潤率の低下について説明を與えたのはケインジァンの人々であるが、アメリカの資料によれば今世紀に入つてから資本係數は下落し、資本の限界生産力は上昇している。ここで彼は國民所得Yが、投資Iと消費Cとから形成され、雇用量NはYの函數として變動するというケインズの立場を繼承する。しかし投資はYの函數であるばかりでなく、資本蓄積高Kの函數でもある。短期理論に關する限り、雇用はYのみの函數であるが、長期では所得の成長率の函數と考えざるを得ない。第一圖においてSは貯蓄性向を示し、Iは投資を示す。始めの均衡狀態において完全能力下の所得水準を OY_1 とする。もし附加的な貯蓄と投資が行われるならば、資本總額Kは縱軸に沿つて增大するであろう。生産能

第一圖